
泡の子供

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡の子供

【Zコード】

Z9563P

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

シャボン玉で遊ぶ少女とそれを見守る一人の少女の不思議な出会い。

泡の子供は生まれてすぐに死ぬ。

いつのまにか、何かの拍子にパチンと弾けて、散っていく。
ジャングルジムで囚われのお姫様を氣取った私が、もし本当に誰も見つけてくれなければ、私は死ぬのだろう。と密かに思っている。
けれどこの身体は必死に生きようとしがみついていて、意味もなくパチンと人生は終わってくれない。

シャボン玉液を零した幼児が耳障りに泣いている。

大人達はおしゃべりに夢中で気付いていない。

お前は世界に絶望しているのか？

私は素早く牢屋の鍵を破つて脱獄する。

「どうしたの？ 落としちやつたのかあ

屈み込んで、その小さな瞳を見た。

あれは、底無しに黒い。何かを見透かすように私を見ている。

「大丈夫。泣かなくていいよ

「うん。泡の子が可哀相だつたの」

「そう？」

神様どうか、この無垢で善良な魂を孤独から遠ざけてください。
私は泡の子の為に、涙を流した彼女にひざまづく。

「ママがくるまで私と遊ぼう」

「うん、いいよ遊んであげる」

危なつかしくて、意味不明で、子供は好きじゃないけれど、すぐに笑顔になつた彼女を連れて私ははしゃぐ。

遊んでくれてありがとう。

気付いてくれてありがとう。

夕暮れが静かに彼女と私の頬を赤く染める。

小さな泡の子等が風で舞い上がる。

世界に触れた私は全然、孤独でも虚しくもなかつた。

ただジヤングルジムのてっぺんで静かに親子が帰つて行くのを見
送つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9563p/>

泡の子供

2011年1月8日21時38分発行